

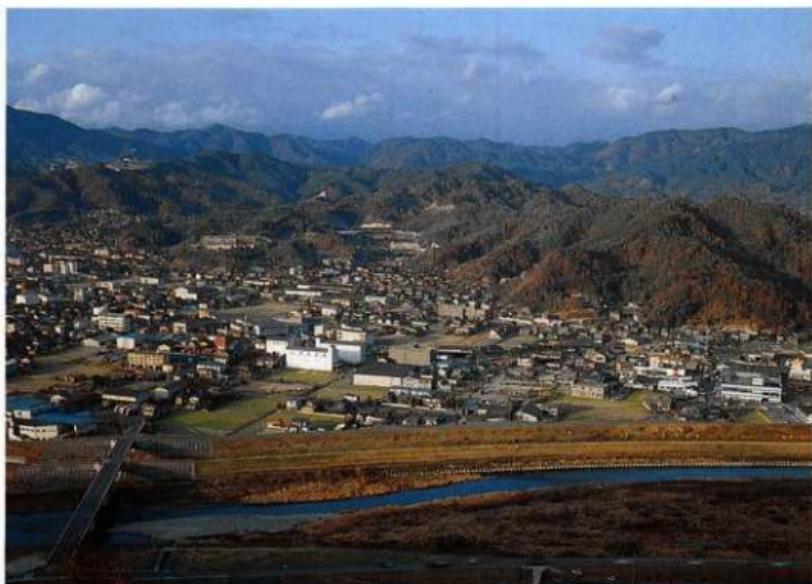
# 備後国府跡

—推定地にかかる第10次調査概報—

1992

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

卷頭図版



府中市中須町遠景（南から）

## 例　　言

- 1 本概報は、平成3(1991)年10月28日から12月13日にかけて府中市中須町で実施した備後國府跡推定地の第10次発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は広島県教育委員会の委託を受け、財團法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、恵谷泰典・渡邊昭人が行なった。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・写真撮影は、恵谷が中心となり行なった。
- 5 本文の執筆は恵谷(I~V), 加藤 謙(広島県教育委員会事務局文化課)(VI)が分担し、編集は恵谷が行なった。
- 6 調査区(トレンチ、略=T)には4桁の一連番号を付し、上2桁の数字は調査次数を表す。
- 7 土器の断面は、須恵器:黒ヌリとした。
- 8 図版の遺物番号は挿図の遺物番号と一致する。
- 9 本書に使用した北方位は原則として磁北である。
- 10 第1図は建設省国土地理院発行の1:50,000(府中・井原)の地形図を使用した。

## 目　　次

I	はじめ	1
II	位置と環境	2
III	調査の概要	
1	既往の調査	4
2	本年度の調査	5
IV	遺構と遺物	
1	遺構	6
2	遺物	10
V	まとめ	11
VI	総括	12

## 図版目次

巻頭図版 府中市中須町遺景（南から）

図版1 a 中須町地区遺景（南から）

    b 1001T北壁土層断面（南西から）

    c 1002T北壁土層断面（南西から）

図版2 a 1003T南壁土層断面（南東から）

    b 1004T東壁土層断面（北西から）

    c 1005T東壁土層断面（南西から）

図版3 a 1006T北壁土層断面（南西から）

    b 1007T西壁土層断面（南東から）

    c 1008T東壁土層断面（南西から）

図版4 a 1009T東壁土層断面（南西から）

    b 1010T北壁土層断面（南東から）

    c 1011T北壁土層断面（南東から）

図版5 a 作業風景

    b 同上

    c 出土遺物

## 挿図目次

第1図 周辺主要遺跡等分布図（1：50,000）	2
第2図 トレンチ位置図（1：5,000）	折込み
第3図 1001～1005T土層断面実測図（1：80）	7
第4図 1006～1010T土層断面実測図（1：80）	9
第5図 1011T土層断面実測図（1：80）	10
第6図 出土遺物実測図（1：3）	10
付 図 第1～10次調査区位置図（1：10,000）	

## I はじめに

備後國府跡の研究は、備後地域の古代史解明に欠くべからざる事項であり、古くからその所在地については多くの研究者により研究が進められてきた。その一つとして府中説が唱えられている。これは10世紀に編集された『後名類聚抄』の国郡部に「國府在草田郡」の記載があることから、古代の草田郡のなかに国府があり、それが現在の府中市市街地及びその一帯にあたると推定されてきた。しかし、市街地における本格的な発掘調査は行なわれたことはなく、国府跡と確定する証拠は得られないままであった。

一方、福山市及びその周辺地域が昭和38(1963)年に備後工業整備特別地域に指定されるなど工業の急速な発展に伴い、府中市でも平野部とその周辺の丘陵部の開発が進み、市街地が拡大している。また住宅化が進み、発掘調査による国府の存在の確認が困難になることが予想されたため、早急に国府跡の有無等の確認をすることが必要になった。そこで広島県教育委員会は、昭和57(1982)年度から年次的に発掘調査を実施することにした。昭和57年度は広島県教育委員会、昭和58(1983)～63(1988)年度は広島県立埋蔵文化財センターが調査を担当し、平成元(1989)年度以降は財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが広島県教育委員会の委託を受けて調査を実施している。本年度は第10次発掘調査として府中市中須町で実施した。

なお、調査に当たっては府中市・府中市教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・広島県立歴史博物館から多大な協力を受け、特に篠原正治(府中市教育委員会)・高橋孝二(府中市史編纂室)の両氏には調査全般にわたって大変御世話になった。また、発掘調査の土地所有者及び使用者である佐藤博文、湯藤タカ子、唐川博光、佐藤輝男、野村平人、小寺幸一、野村昌宏、高橋孝、横高憲雄、佐藤博己、佐藤明、後藤マサ子、唐川隆三の各氏並びに調査に参加された地元の方々からも多大な協力を受けた。文末ながら記して関係者に深く感謝の意を表します。

## II 位置と環境



第1図 周辺主要遺跡等分布図（1：50,000 府中・井原の一部）

- |          |               |         |        |
|----------|---------------|---------|--------|
| 1 常城跡推定地 | 2 八ツ尾城跡       | 3 伝吉田寺跡 | 4 前原遺跡 |
| 5 栗柄廃寺跡  | 6 甘南備(賀武奈備)神社 |         | 7 総社   |
| 8 南宮神社   | 9 吉備津神社       |         |        |

府中市は、広島県東南部のやや内陸に位置する工業都市である。江戸時代は石見銀山へ行く街道にあたり、上下とともに宿場町として栄えていた。また、この地方の特産物を中心とした農村家内工業などの商工業が盛んであった。現在は「機械」等の製造が基幹産業であるが、地場産業として「府中たんす」で有名な木工業、縫製業、醸造業などの産業が盛んである。

地理的側面からみると、府中市は吉備高原面にあたる標高400～700mの小規模連山によって市街地の三方を囲まれており、市域の大半は神辺平野西域にあたる。また、世羅台地に源を発する芦田川が市域の西北から南東に向けて貢流しており、現在では市街地の南端を流れているが、かつては氾濫を繰り返したことが知られている。市街地の標高は20～40m、現芦田川河口からは約22kmである。

市街地には、条里の名残りとも考えられている磁北から東に約30°偏した地割が見られるが、元町には地割が東西南北の正方位をとる一角が存在し、この区画は国府の中心部である可能性が高いと推定されている。<sup>(1)</sup>

次に周辺の古代の関連遺跡を概観する。

寺院跡としては、元町に伝吉田寺跡、栗柄町に栗柄庵寺跡が確認されている。伝吉田寺跡では、川原寺創建時と同型式の軒丸瓦・軒平瓦や藤原宮式に類似する軒丸瓦が出土し、西に金堂、北に講堂を配した伽藍配置が想定されている。<sup>(2)</sup>芦田川の南に位置する栗柄庵寺跡では、伝吉田寺跡出土軒瓦と型的に共通する軒丸瓦・軒平瓦が出土しているが、伽藍配置は不明である。芦田川を少し遡った父石町は、芦田川本流に御園川が合流するところであるが、ここには伝吉田寺跡出土軒瓦と類似した奈良時代後半期の軒丸瓦・軒平瓦や土馬等の遺物が出土した前原遺跡が存在し、軍團跡もしくは駅家跡と考えられている。市街地北方の亀ヶ岳は「続日本紀」に記載のある朝鮮式山城の常城と推定されている。<sup>(3)</sup>また、この南側には建仁年間（1201～1203）に備後國守杉原光平によって築かれた八ツ尾城跡が存在する。

一方、元町の現小野神社境内には總社、出口町には「延喜式」神名帳に記載のある「賀武奈備神社」に比定される甘南備神社、栗柄町には南宮神社、東隅の新市町には「備後一の宮」として有名な吉備津神社がある。

#### （註）

(1) 広島県立埋蔵文化財センター編「備後國府跡－推定地にかかる第5次調査報告－」昭和62（1987）年  
片山和哉「備後國府跡の所在について－備後國府跡発掘調査5年間の成果と意義－」「芸備」第18集  
芸備友の会 昭和62（1987）年

(2) 広島県教育委員会「伝吉田寺跡発掘調査報告」昭和43（1968）年

(3) 鹿坂光彦「備後國府成立の考古学的背景」「芸備」第12集 芸備友の会 昭和57（1982）年

### III 調査の概要

#### 1 既往の調査（付図）

年次調査以前の市街地における調査としては、昭和55（1980）年10月広島県教育委員会が府中町の府中市文化センター建設予定地において試掘調査を行ない、中世の遺物が出土している。また昭和57（1982）年6月、鶴飼町の広谷小学校プール建設予定地で行なわれた試掘調査で弥生土器が出土したもの、ともに国府に関係する遺構・遺物は確認されなかつた。

昭和57年度からは国府の所在及び範囲確認を目的とした年次調査が開始された。以下、調査の概要を年次別に述べる。

第1次調査（昭和57年度） 鶴飼町～広谷町で奈良～平安時代の遺物包含層を確認したが、遺構は確認できなかつた。

第2次調査（昭和58年度） 鶴飼町で弥生～鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。特に鶴飼町寺ノ前地区では奈良～平安時代の倉庫跡と思われる掘立柱建物跡を検出し、柱穴の掘り方から陶碗が出土している。

第3次調査（昭和59年度） 元町マエ地区で弥生～古墳時代の遺構・遺物、元町明ゼン・ツジ地区で奈良～平安時代の掘立柱建物跡等の遺構、緑釉陶器・陶碗・青磁・白磁等の遺物を確認した。

第4次調査（昭和60年度） 元町砂山地区で奈良～平安時代の柱穴、平安時代の井戸、木簡・陶碗等の遺物、元町ワキ地区で奈良～平安時代の柱穴・溝、緑釉陶器・青磁・白磁等の遺物を確認した。

第5次調査（昭和61年度） 元町片岡地区でピットや溝等の遺構、縄文時代～中世の遺物、元町新角メン地区で奈良～平安時代の遺物包含層、元町ホリノ河内地区では中世の柱穴、弥生時代～中世の遺物包含層を確認した。

第6次調査（昭和62年度） 元町砂山地区で平安時代～中世の掘立柱建物跡・井戸・溝・土器窓等の遺構・遺物、元町松原地区で奈良～平安時代の柱穴・溝等の遺構・遺物を確認した。

第7次調査（昭和63年度） 出口町辻横田地区で古墳時代～中世の柱穴群・土壙等の遺構・遺物包含層、出口町辻砂場地区で奈良～平安時代の緑釉陶器等を含む遺物包含層を確認した。

第8次調査（平成元年度） 出口町辻羽中地区で平安時代の柱穴・溝等の遺構、緑釉陶

器・白磁・陶瓦・銅鏡・墨書き土器等の遺物を確認した。

第9次調査（平成2年度） 高木町で弥生時代および奈良～平安時代の遺物包含層、府川町で中世の柱穴・溝等の遺構、土師質土器・古鉄等の遺物を確認したが、目崎町では遺構・遺物は確認できなかった。

なお、年次調査と並行して府中市教育委員会などによって市街地内の発掘調査が行なわれている。昭和63年には第4・6次調査を行なった元町砂山地区で府中市埋蔵文化財調査団が都市計画街路建設に伴う発掘調査を実施し、奈良～平安時代の倉庫跡と考えられる掘立柱建物跡・井戸・溝等の遺構を確認している。また、同年の出口町寄羽中地区で工事中に7～8世紀の須恵器（杯・壺）・土師器が多量に出土して緊急調査が行なわれている。平成2年に行なわれた府中町における図書館建設予定地の試掘調査では、遺構の存在は確認されなかった。第3次調査を行なった元町ツヅ地区での平成2～3年にかけての確認調査では、奈良～平安時代の長大な掘立柱建物跡・橋・溝等の遺構を検出し、須恵器・土師器等の遺物が多数出土している。

## 2 本年度の調査（第2図）

本年度の調査は、国府推定地の東限を確認することを目的とした。トレントを設定した調査地点は府中市街地の東端で、芦品郡新市町に接する中須町に合計11か所設定した。トレントの規模はすべて長さ10m・幅3mとした。

### 中須町地区

1001～1011Tでは国府に關係するような遺構はまったく確認されなかった。トレントの最下層からは砂層・砂礫層・粘土層のいずれかを検出したが、その間の層位では遺構は確認できなかった。出土遺物は近世～現代の陶磁器類がほとんどを占めている。

### 参考文献

広島県教育委員会「備後國府跡－推定地にかかる第1次調査報告－」 昭和58(1983)年

広島県立埋蔵文化財センター編「備後國府跡－推定地にかかる第2～7次調査報告－」 昭和59～平成元(1984～1989)年

財團法人広島県埋蔵文化財調査センター編「備後國府跡－推定地にかかる第8～9次調査報告－」 平成2～3(1990～1991)年

府中市埋蔵文化財調査団「備後國府跡－都市計画街路建設に伴う発掘調査報告－」 平成元(1989)年

## IV 遺構と遺物

### 中須町地区（第2図）

#### 1 遺構

##### 1001T（中須町池下）（第3図）

府中市立旭小学校から東へ約80mの水田に東西方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、耕作土（第1層）・淡黄灰色砂質土（第2層）・明茶灰色砂質土（第3層）・茶灰色砂質土（第4層）となる。第3層には擾乱層が認められ、暗灰褐色粘土が混入していた。また第4層は厚さが1m以上にわたっており、この地点が谷状地形であることから谷に堆積した土層であることが判明した。遺構は確認されず、遺物は第2・3層から土師器・須恵器・土師質土器・陶磁器類が出土した。

##### 1002T（中須町五反田）（第3図）

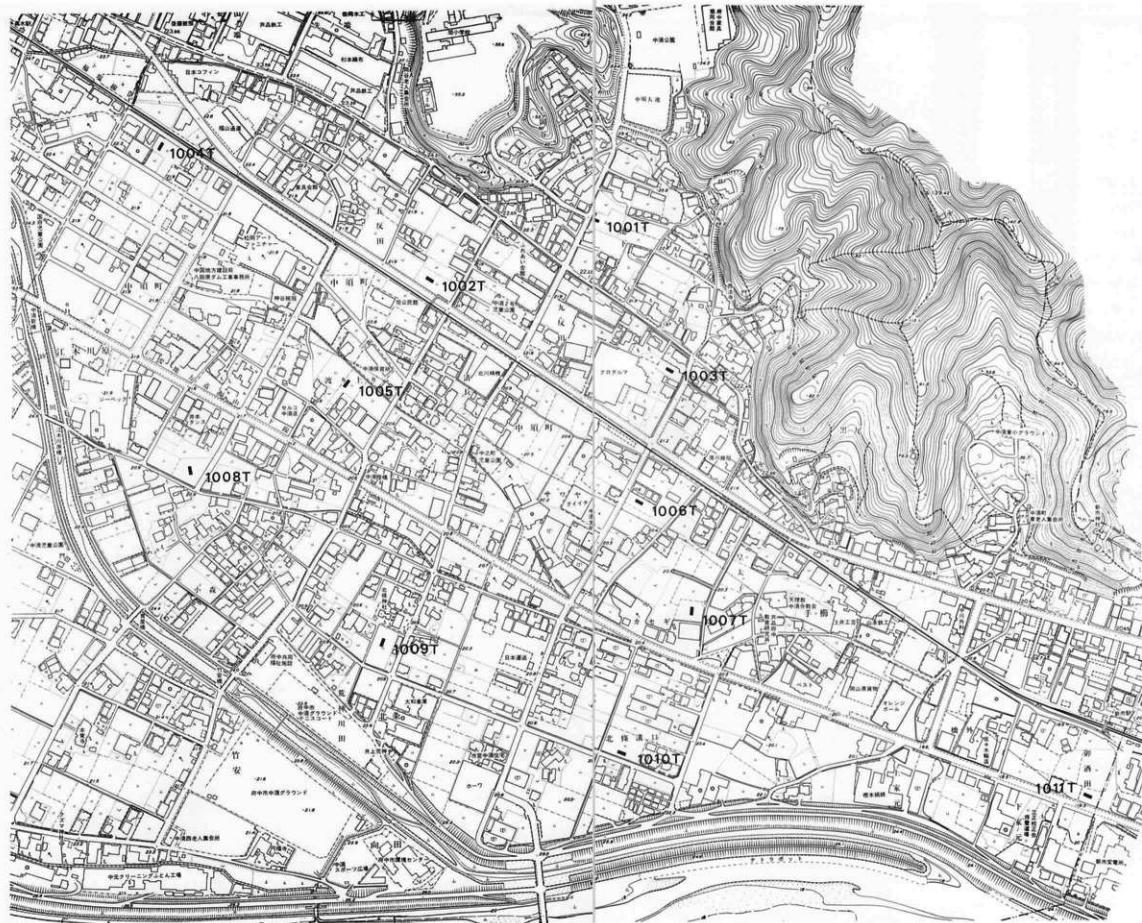
府中市立旭小学校から南へ約80mの休耕田に東西方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、旧耕作土（第1層）・淡茶灰色砂質土（第2層）・灰白色～淡黄灰色砂（第3～6層）・暗褐色粘質土（第7層）・淡灰褐色砂質土（第8層）となる。第3～6層は土層断面から河川の埋土と考えられ、芦田川の流路が現在よりも北側に位置していたことが推定できる。遺構は確認されず、遺物は第1・2層から弥生土器・須恵器の杯（第6図1）・土師質土器・陶磁器類が出土した。

##### 1003T（中須町九反田）（第3図）

1001Tから南東へ約90mの休耕田に東西方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、旧耕作土（第1層）・淡黄灰色砂質土（第2層）・淡灰褐色砂質土（第3層）・白色～淡茶白色砂（第4～7層）・明茶灰色粘質土（第8層）となる。第4～9層は粗い砂から細かい砂の漸移的堆積であり、1002Tと同様に河川の埋土と考えられる。遺構は確認されず、遺物は第1～3層から土師質土器・陶磁器類、特に第3層から須恵器の碗1点（第6図2）が出土した。

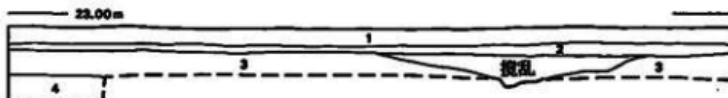
##### 1004T（中須町国府）（第3図）

J R福塩線高木駅から線路沿いに東へ約100m、旭小学校から西へ約140mの水田に南北方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、耕作土（第1層）・暗褐色粘質土（第2層）・淡赤褐色砂質土（第3層）・灰褐色粘質土～赤灰色砂質土（第4～6層）・暗黄灰色砂質土（第7層）・淡青灰色粘質土（第8層）・淡赤灰色砂（第9層）となり、澆水は最下層からみられた。遺構としては井戸・溝を確認した。井戸は木板を円形に配し内側を竹の



第2図 トレンチ位置図 (1:5,000)

1001T (北壁)



1 耕作土                  3 明茶灰色砂質土  
2 淡黃灰色砂質土      4 茶灰色砂質土

1002T (北壁)



1 旧耕作土                  4 淡灰色砂                  7 暗褐色粘質土  
2 淡茶灰色砂質土          5 淡灰褐色砂                  8 淡灰褐色砂質土  
3 灰白色砂                  6 淡黃灰色砂

1003T (南壁)



1 旧耕作土                  4 白色砂                  7 淡茶白色砂  
2 淡黃灰色砂質土          5 茶灰色砂                  8 明茶灰色粘質土  
3 淡灰褐色砂質土          6 淡灰色砂

1004T (東壁)



1 耕作土                  4 灰褐色粘質土                  7 暗黃灰色砂質土  
2 暗褐色粘質土          5 暗灰褐色粘質土          8 淡青灰色粘質土  
3 淡赤褐色砂質土          6 赤灰色砂質土          9 淡赤灰色砂

1005T (東壁)



1 耕作土                  4 灰褐色砂質土                  7 黃灰色砂質土  
2 淡灰褐色粘質土          5 灰白色砂質土          8 茶色~黃白色砂  
3 淡灰褐色砂質土          6 青灰色砂質土

第3圖 1001~1005T 土層断面実測図 (1:80)

タガで固定したもの、溝は径10cm位の円錐を並べた浅いものであった。第4～6層は井戸内埋土である。遺物は第1層から陶磁器の破片が若干出土した。

#### 1005T（中須町渡り上り）（第3図）

中須保育所の南隣の水田に南北方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、耕作土（第1層）・淡灰褐色粘質土（第2層）・淡灰褐色砂質土（第3層）・灰褐色砂質土（第4層）・灰白色～黄灰色砂質土（第5～7層）・茶色～灰白色砂（第8層）となる。第8層以下は河原石を含む疊層となり、砂粒も粗い。第3層上面には細かい砂の層が薄く堆積していた。遺構は確認されず、遺物は第1～3層から陶磁器の破片が若干出土した。

#### 1006T（中須町カセギ）（第4図）

府中市農協中須支所の北東方向約20mの水田にトレンチを設定した。土層の堆積状況は、耕作土（第1層）・淡灰褐色砂質土（第2層）・灰褐色粘質土（第3層）・淡灰色砂質土（第4層）・淡茶灰色粘土（第5層）となる。最下層から深さ1m以上にわたっては湧水のみられる青灰色粘土（通称ザブク）が確認された。遺構は確認されず、遺物は第1層から須恵器・土師質土器・陶磁器類が出土した。

#### 1007T（中須町皇太子）（第4図）

1006Tから南へ約60mの水田に南北方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、耕作土（第1層）・淡茶灰色～淡黄褐色砂質土（第2～4層）・黄褐色砂（第5層）・暗灰褐色砂質土（第6層）となる。第4層以下は河原石を含む砂疊層となり、河川の氾濫の跡と推定される。遺構は確認されず、遺物は第1～5層から陶磁器類が出土した。

#### 1008T（中須町組々）（第4図）

1005Tから南西へ約90mの水田に南北方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、耕作土（第1層）・暗橙褐色砂質土（第2層）・灰白色砂（第3層）・灰色～淡黄灰色砂質土（第4～6層）・茶白色砂（第7層）となる。第4層以下は河原石を多く含む砂疊層であり、第4層上面には細かい砂が薄く広がる。また第3層から暗渠を検出した。遺構は確認されず、遺物は第6層から土師質土器の破片が若干出土した。

#### 1009T（中須町北條）（第4図）

北條神社南側で1008Tから南東へ約130mの水田に南北方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、耕作土（第1層）・茶灰色粘質土（第2層）・灰白色砂（第3層）・灰褐色粘質土（第4層）・暗茶灰色砂質土（第5層）・暗灰色粘質土（第6層）・黒灰色粘土（第7層）・淡茶灰色砂質土（第8層）・灰色粘土（第9層）となる。遺構は確認されず、遺物は第1～4層から近世の瓦・陶磁器類が出土し、特に第3層で数多く出土した。

## 1006 T (北壁)

— 20.30m —



- 1 耕作土  
2 淡灰褐色砂質土  
3 灰褐色粘質土  
4 淡灰色砂質土  
5 淡茶灰色粘土  
6 灰褐色粘質土

## 1007 T (西壁)

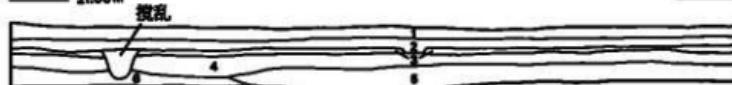
— 20.00m —



- 1 耕作土  
2 淡茶灰色砂質土  
3 灰色砂質土  
4 淡黄褐色砂質土  
5 黄褐色砂  
6 暗灰褐色砂質土

## 1008 T (東壁)

— 21.00m —



- 1 耕作土  
2 暗橙褐色砂質土  
3 灰白色砂  
4 灰色砂質土  
5 黄灰色砂質土  
6 淡黄灰色砂質土  
7 茶白色砂  
8 淡灰色砂質土

## 1009 T (東壁)

— 20.80m —



- 1 耕作土  
2 茶灰色粘質土  
3 灰白色砂  
4 灰褐色粘質土  
5 暗茶灰色砂質土  
6 暗灰色粘質土  
7 黑灰色粘土  
8 淡茶灰色砂質土  
9 灰色粘土

## 1010 T (北壁)

— 20.00m —



- 1 耕作土  
2 橙褐色粘質土  
3 黄灰褐色砂  
4 灰褐色粘質土  
5 暗橙褐色粘質土  
6 灰色粘土

0 4m

第4図 1006～1010 T 土層断面実測図 (1:80)

調査地点には昔「西法寺」という寺院があり、洪水のため山方へ移転したと伝えられており、瓦等はそれに伴うものと考えられる。

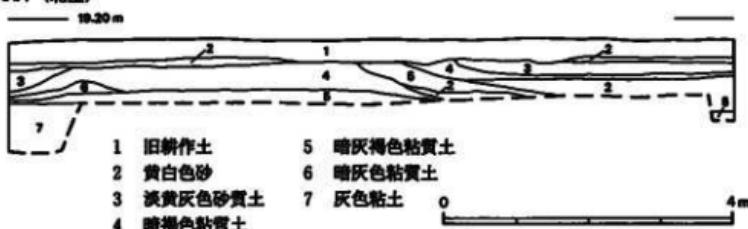
#### 1010T（中須町北條溝口）（第4図）

1009Tから東へ約140m、1007Tからは南に約80mの水田に東西方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、耕作土（第1層）・橙褐色粘質土（第2層）・黄灰褐色砂（第3層）・灰褐色粘質土（第4層）・暗橙褐色粘質土（第5層）・灰色粘土（第6層）となる。遺構は確認されず、遺物は第1～4層から近世の瓦・陶磁器類が出土した。

#### 1011T（中須町御酒田）（第5図）

JR新市駅から南へ約20mの休耕田に東西方向のトレンチを設定した。土層の堆積状況は、旧耕作土（第1層）・黄白色砂（第2層）・淡黄灰色砂質土（第3層）・暗褐色～暗灰色粘質土（第4～6層）・灰色粘土（第7層）となる。第7層より下層は疊層である。遺構は確認されず、遺物は第1～4層から土師質土器・陶磁器類が出土した。

#### 1011T（北壁）

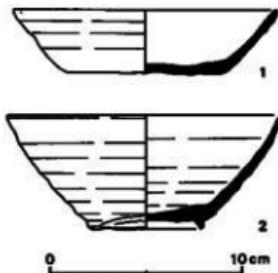


第5図 1011T 土層断面実測図 (1:80)

#### 2 遺物（第6図）

1は1002T第2層、2は1003T第4層出土の須恵器である。

1の杯は復元口径13.6cm、器高3.3cmである。底部に回転ヘラ切りがみられるほかは回転ナデが施されている。胎土は精緻、色調は灰白色、焼成不良である。2の碗は復元口径14.2cm、器高5.9cm、高台径5.7cmで、高台は貼り付けである。胎土は精緻、色調は暗灰色、焼成良好である。



第6図 出土遺物実測図 (1:3)

## V ま と め

本年度は、府中市中須町において調査を実施した。ここでは中須町での調査結果を中心 に今回の調査を概観してまとめとする。

中須町は府中市の東端に位置しており、東は芦品郡新市町に接する。地形的にみると北側には龜寿山から派生した丘陵が迫り、南側には蛇行した芦田川が東へ流れている。山と川の間の平野には水田が広がっているが、近年は住宅地・駐車場等としての利用が増加している。今回調査したのは丘陵と芦田川の間を占める平野部である。従来の分布調査によると北側の丘陵上の畠で須恵器・土師質土器・陶磁器等が表面採集されているものの、平野部の水田・休耕田などでは遺物はほとんど確認されていない。

今回の調査においては、トレンチを中須町平野部の東西方向約1.5kmにわたる範囲に全部で11か所設定した。トレンチを設定した調査区の標高は概ね19~23mである。中須町は、近世に河川改修工事が行なわれる以前は芦田川の中洲であったと推定されており、「中須」という地名も元来は「中洲」からきているといわれている<sup>(1)</sup>。また、氾濫原として認識されており、近くは昭和20年の大水の際に大規模な浸水があったと伝えられている。これらのことから、調査においてはかなりの湯水が予想されたが、設定したトレンチ11か所のうち湯水が認められたのは1か所だけであった。河川が氾濫した痕跡と考えられる砂や礫の層は1004・1006Tでは検出できなかったが、それ以外のトレンチでは砂の層や疊混じりの砂層をほぼ確認することができた。特に、1002・1003Tでは河川の跡と考えられる深い落ち込みを検出し、多量の河原石や砂の堆積を確認した。この2か所のトレンチの位置はかなり丘陵寄りで、芦田川の支流からも約200~300m離れている。このことから、河川の流路が現在とは異なっていたと推定することができる。また、1003Tの第3層からは須恵器の碗(第6図2)が出土し、その時期を平安時代中頃に比定することができ<sup>(2)</sup>、出土層位が河川跡と推定できる落ち込みの上層であることを考え合わせると、平安時代中頃以前には河川の流路が丘陵近くにも来ていた可能性が高いと結論付けることができよう。しかし、國府に直接関係する造構・遺物は確認できなかった。

### (註)

(1)『広島県の地名』平凡社 昭和57(1982)年

(2)伊藤 実「備後国府跡発掘調査の成果 出土土器」「備後国府と福龍館・太宰府・西日本の国府」府中市教育委員会 平成3(1991)年

## VI 総括

(推定) 備後國府跡発掘調査10年間のまとめ

今年度の第10次調査によって、昭和57年度から県教育委員会が実施してきた(推定)備後國府跡の確認調査は終了するが、ここで10年間の調査の成果について簡単にまとめてみたい。

発掘調査は、備後國府跡の所在確認及び保存対策を講じるための資料を得ることを目的として行なわれた。各年次ごとに調査区を設定し実施したが、調査区の設定に当たっては、遺構の存在の可能性が高い場所を選定したため、調査の密度にばらつきが生じている。特に、県道福山庄原線以南については芦田川の氾濫原となっていたことが予想されたためほとんど調査を行なっていない。

各年次の調査結果については報告書に譲ることとして、総体的に見ると、国府が営まれていたと考えられる奈良～平安時代の遺構は、調査区の偏重を考慮に入れるとしても、鷹飼町から出口町の一带にかけての市街地北部に限定されて分布し、南部はほとんどの調査区で、当初の予想どおり氾濫原と思われる砂層を確認するに留まった。

北部のなかでは、元町の音無川流域で獨立柱建物跡・井戸・溝状造構などの遺構と土師器・須恵器・縄文陶器・灰釉陶器・磁器・木簡などの多くの遺物を検出し、特に遺構・遺物の密度が濃いのが注目される。しかし、他の地区でもその密度に差はあるが獨立柱建物跡や溝状造構、陶瓦や墨書き土器などが出土しており、これらの遺構・遺物がいずれも他の官衙遺跡と同じ内容をもつことから、府中市街地の北側には元町地区を中心として国府に関連した施設が広く存在していた可能性が極めて高くなった。また、これらの地区では縄文時代～中世の遺構や遺物も出土しており、発掘調査による通史の解明も期待されるところである。

一方、調査の遅れている県道福山庄原線以南についても、第9次調査で室町時代後半の土壙・溝状造構とそれに伴う土師質土器と古鉄が出土し、中世の遺構の存在が明らかになった。市街地南部は前述のとおり芦田川の氾濫原であると考えられるが、ここには氾濫原を示す地名とともに「土井」・「六日市」・「三日市」など中世的な地名が残っている。中世の市が領主権の及ばない場所に開かれていたことはよく知られるところであり、この中世の遺構の存在は、国府が衰微した後この地域でも芦田川が形成した氾濫原に市が立ち、人々が日々の暮らしを営んでいたことを示していると言えよう。

さて、以上のような調査を踏まえると、付図のとおり市街地北部については国府関連遺

構を中心に調文時代から中世までの複合遺跡として捉えることができる。ただ、府中市街地は近年開発が急で、宅地化が著しくすんでいるため、早急に現状保存を含めた保護対策を講じていく必要がある。また市街地南部は、中世の造構の広がりを確認していくため、今後より詳細な試掘調査を継続し、更に平野部ばかりでなく周辺丘陵部についても古瓦の出土などが知られているため調査地域を拡大させ、時間的・空間的総体としての地域史を解明していく方向へ向かわなければならない。

具体的方法としては、図中太線で囲んでいる範囲内で一般住宅建設を含めた開発行為を行なう場合、すべて事前の発掘調査を実施し、造構の状況を明らかにすることが必要であり、さらに元町地区のように国府関連造構が密集している地域については史跡指定等遺跡の保存の方策を立てる必要がある。一方市街地南部や周辺丘陵部など太線枠外の地域では、開発に伴う事前の分布調査を丹念に実施することにより、遺跡の有無・内容・範囲を確認し、遺跡保護或いは地域史解明のための材料を蓄えていかなければならないであろう。

a 中須町地区遠景  
(南から)



b 1001T  
北壁土層断面  
(南西から)



c 1002T  
北壁土層断面  
(南西から)



a 1003T

南壁土層断面

(南東から)



b 1004T

東壁土層断面

(北西から)



c 1005T

東壁土層断面

(南西から)



a 1006T

北壁土層断面

(南西から)



b 1007T

西壁土層断面

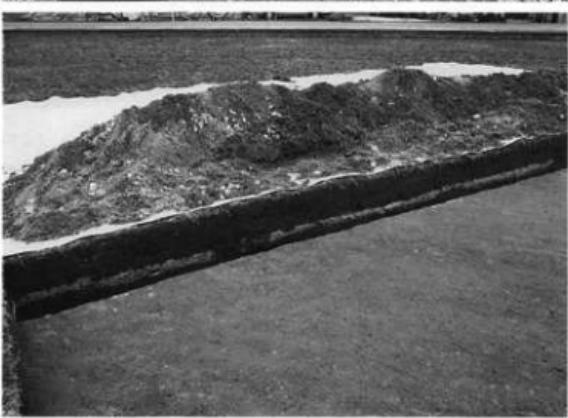
(南東から)



c 1008T

東壁土層断面

(南西から)



a 1009T

東壁土層断面  
(南西から)



b 1010T

北壁土層断面  
(南東から)



c 1011T

北壁土層断面  
(南東から)



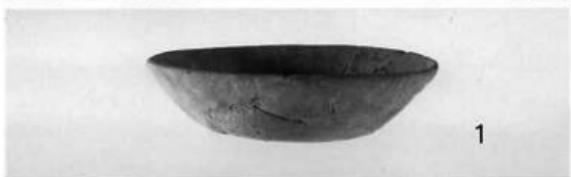
a 作業風景



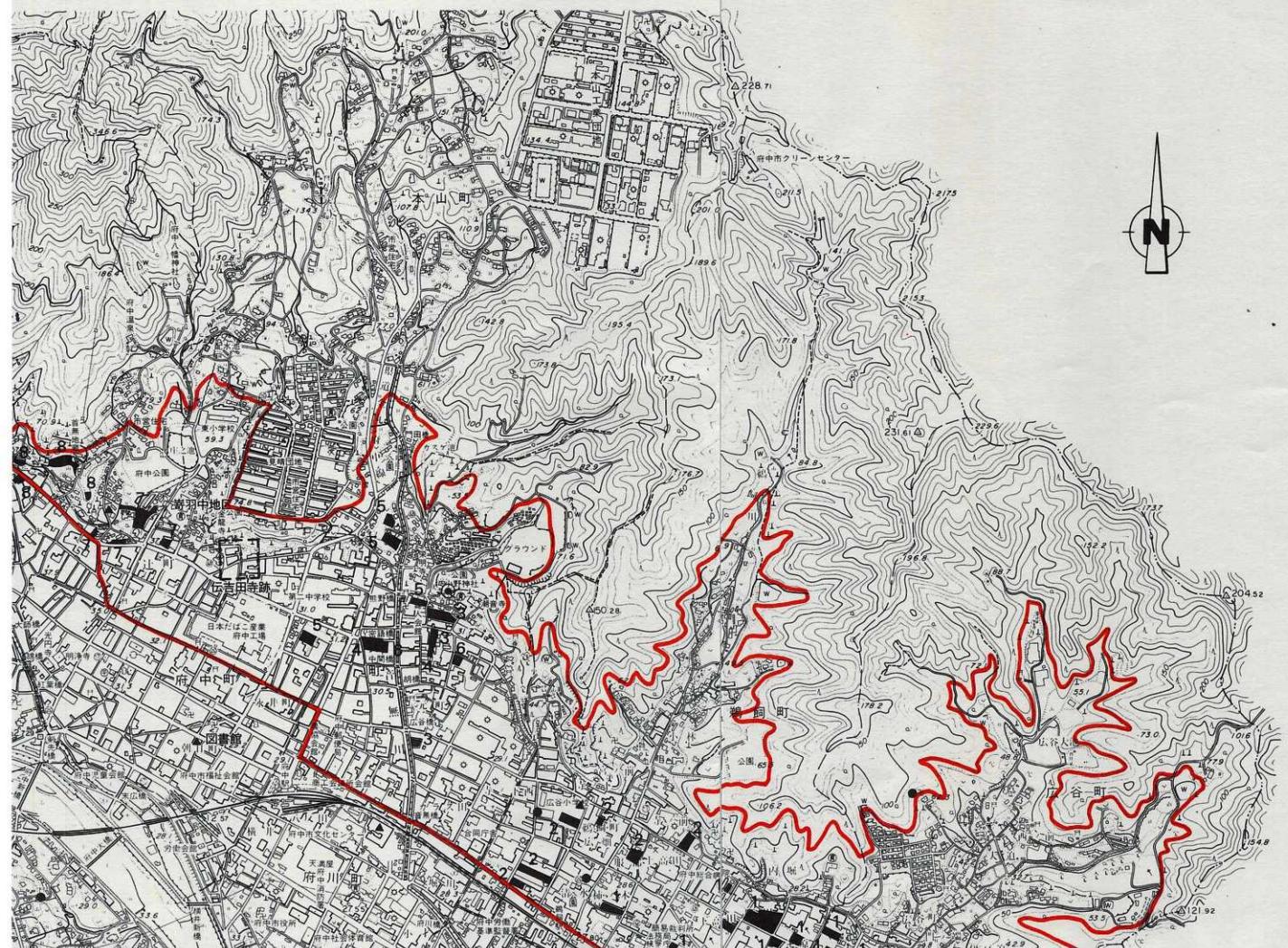
b 同 上



c 出土遺物



101.5  
+  
156.0





图例见图 (1 : 10 000)

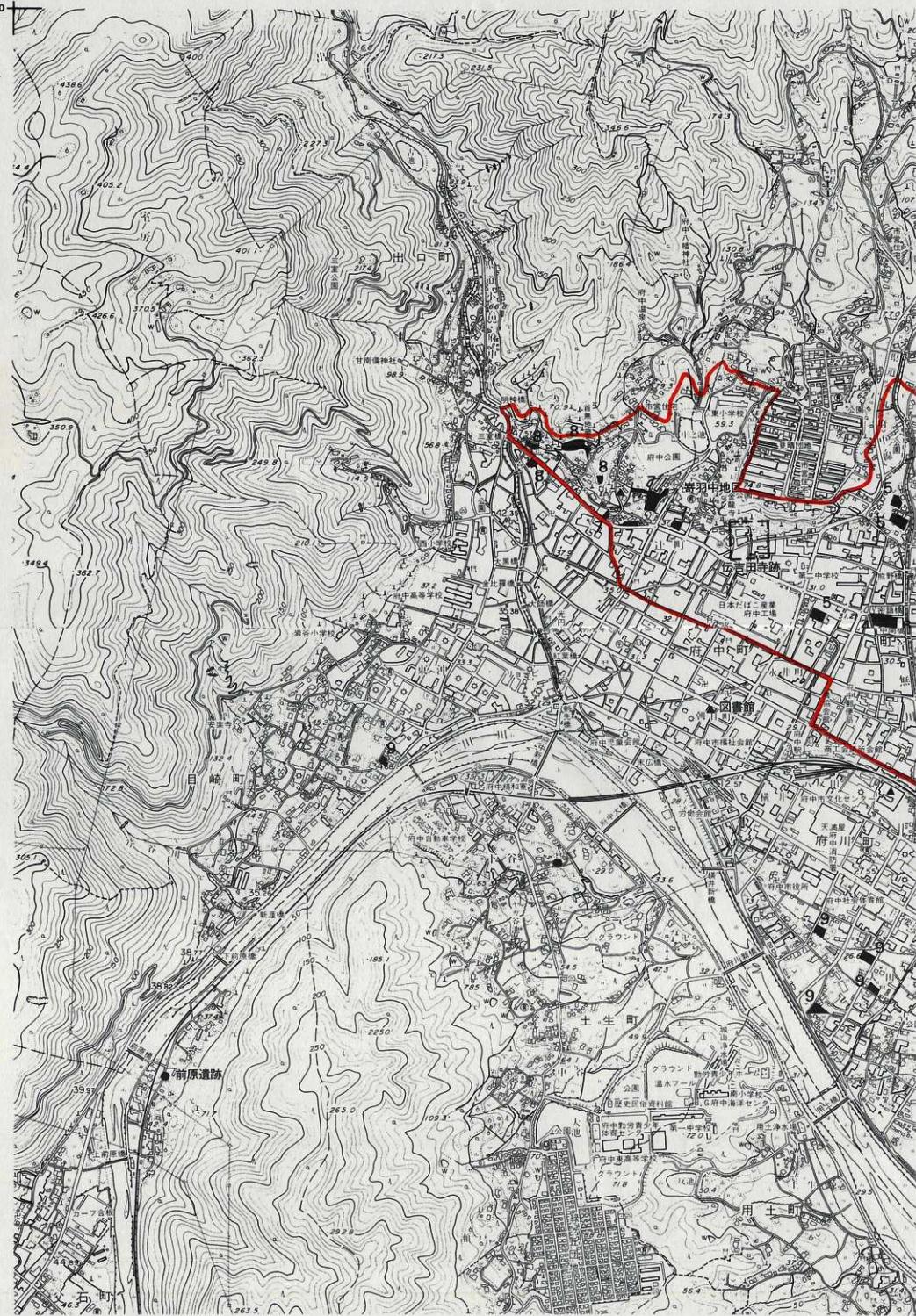
●：継社　■：古瓦出土地）（朱線は府中市街地遺跡の範囲）



付図 第1~10次調査区位置図(1:10,000)  
 (1, 2, 3……: 調査年次, ▲: 県・市教育委員会試掘調査地点, ●: 総社, ●: 古瓦出土地) (朱線は府中市街地遺跡の範囲)

+96.0

-156.0



## 文献データシート

書名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第105集 備後国府跡 - 推定地にかかる第10次調査概報 -		
執筆者	恵谷泰典・加藤 雄		
発行所	財團法人広島県埋蔵文化調査センター	発行年月日	1992年3月
遺跡名	備後国府跡		
読みみ	びんごくふあと		
所在地	広島県 府中市 中須町		
種別	官衙		
時代	古代		

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第105集

### 備後国府跡

- 推定地にかかる第10次調査概報 -

1992

平成4(1992)年3月 発行

編集・発行 財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区観音新町4丁目8番49号

TEL (082) 296-5751

印 刷 朝日精版印刷株式会社